

日本に現存する  
最古の和歌集「万葉集」を  
わかりやすく紹介します



## 飛ぶ鳥の明日香の里を置きて去なば 君があたりは見えずかもあらむ

訳

飛ぶ鳥の明日香の里を後にして去ってしまったら、  
あなたのいる辺りは見えなくなってしまうだろうか。

元明天皇

巻一（七八番歌）

## 長屋の原にて

『万葉集』のこの歌の題詞によると、和銅三二七（一〇）年二月、藤原宮から寧楽宮（平城宮）へ遷った時、御輿を長屋の原に停め、古郷の方を振



り返り遠望しながら作ったのがこの歌で、作者については「太上天皇の御製」と記す書物がある、とあります。和銅三年は平城遷都の年で、当時の天皇は元明天皇です。『続日本紀』によると、元明天皇は同年正月に大極殿で年頭の儀式に臨み、三月に平城宮へ遷都しました。最近の発掘調査により、同年には平城宮の大極殿が未完成であったことが分かっていますので、元明天皇は藤原宮の大極殿で正月の儀式を行い、題詞にあるように二月に藤原から平城へ行幸し、三月に平城宮で遷都を宣言したということになります。なお、題詞には太上天皇の御製とありますが、和銅三年当時には太上天皇は存在しませんので、元明天皇が和銅八（七一五）年に退位して太上天皇となつた後に題詞が付けられたことが分かります。

藤原から平城へ向かう元明天皇

の御輿が停まった「長屋の原」は、当時の行政地名で言うところの大倭国山邊郡長屋里、現在の天理市西井戸堂町・東井戸堂町付近にあたります。同地には古代の幹線道路である中ツ道が南北に走っており、元明天皇の行幸は中ツ道を利用したとみられます。ここは藤原と平城のちようど中間に当たり、中ツ道の休憩地点であつたと考えられます。この付近から南の方角を望むと、飛鳥・藤原の二帯は遠くに見える山並みの麓辺りとしか分からず、はつきりとは見えません。この地で御輿を停めた元明天皇は、夫の草壁皇子、子の文武天皇が共に眠る飛鳥の里がまもなく見えなくなってしまうであろう当地でこの歌を詠み、古京の飛鳥・藤原に別れを告げ、新京の平城で始まる新たな時代へと気持ちを切り替えようとしたのでしょう。

（本文 万葉文化館 竹内亮）



所 天理市西井戸堂町  
関 天理市観光協会（天理市産業振興館内）  
☎ 0743-63-1242

元明天皇が御輿を停めた長屋の原付近には、中ツ道（現在の県道五一号線）沿いに山邊御縣坐神社があります。山邊御縣は古くからの皇室直轄である倭六御縣の一つで、この辺りは古くから天皇と縁の深い土地でした。

## 山邊御縣坐神社 （天理市）

やまのべのみあがたにいます

和歌や作者などに関連するものを紹介するよ！

## 万葉ちゃんの つぶやき



万葉ちゃん